

十六～十七世紀のドイツ・ルター派の《世界宣教》観と《日本》認識

——ルター派神学者たちの著書・説教・大学所見における《イエズス会日本書翰の引用》をめぐって

蝶 野 立 彦

(1) 「非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教」と「プロテスタントの世界認識」——《カトリックの宣教情報》の引用と再解釈によるプロテスタント的《世界宣教》観の形成

大航海時代のローマ・カトリック宣教師たちによるアフリカ、アメリカ、アジアなど非ヨーロッパ地域での大規模な宣教活動は、「ヨーロッパの文化・言語・価値観」を非ヨーロッパ地域に伝播・移植させるための回路としても機能したが、それはまた同時に、「非ヨーロッパ地域の情報」をヨーロッパに伝える媒体ともなった⁽¹⁾。十五世紀末から十七世紀にかけて夥しい数の《非ヨーロッパ地域での宣教の記録》がヨーロッパで出版されたこと⁽²⁾、また《世界各地での宣教に関する報告》をローマのイエズス会総長に宛てて定期的に送信するイエズス会の通信制度が十六世紀半ばに確立したこと⁽³⁾からも見て取れるように、非ヨーロッパ地域に赴いた宣教師たちは倦むことなく膨大な情報をヨーロッパへと書き送り続けた。そしてヨーロッパのカトリック神学者たちは、そうした情報を援用しながらカトリックの神学的立場を「世界」のなかに位置づけ、「世界」との関連のなかでカトリック教会の権威を喧伝することができた。そうした意味において、この時代の「カトリックによる世界宣教」は「カトリックの世界認識」と表裏一体の関係にあったといえよう。

このように、近世のローマ・カトリック教会が非ヨーロッパ地域での宣教活動を背景にして自らを「世界」のなかに定位させることができたのとは対照的に、カトリックと対立関係にあったプロテスタント諸派は、十七世紀末に至るまで、非ヨーロッパ地域において大規模かつ継続的な組織的宣教活動を行うことはなかった。宗教改革以降のカトリックとの熾烈な競争関係のなかで「ヨーロッパの内部での生き残り」に意を注がなければならなかったプロテスタント諸派の人々にとって「宣教を目的とした非ヨーロッパ地域への渡航」を企図することは困難であったし、カトリック宣教の担い手となった「修道会」に類する組織がプロテスタント諸派に存在していなかったことも、この時代に「プロテスタントによる世界宣教」が行われなかった原因の一つであった⁽⁴⁾。

しかし、プロテスタント諸派による非ヨーロッパ地域への宣教の試みが殆ど行われなかったにもかかわらず、「世界宣教」（あるいは「非キリスト教徒（異教徒）への宣教」）の観念そのものは、マルティン・ルターを始めとする十六～十七世紀のプロテスタント神学者たちにとって重要な議論のテーマであり続けた⁽⁵⁾。そして彼らが「世界宣教」の問題と取り組むきっかけは、多くの場合、カトリックとの論争を通じてもたらされた⁽⁶⁾。十六～十七世紀のカトリック神学者たちは、「カトリックの世界宣教の成功」を「プロテスタントに対するカトリックの優位性の証し」として喧伝

し、「プロテスタントによる世界宣教が行われていないこと」を「真正なキリスト教であるための条件の欠如」として論難した。こうしたカトリックの論難に応答する過程で、プロテスタントの神学者たちもまた、「世界宣教」の問題に、そして「世界」との関わりのなかで宗教改革あるいはプロテスタントの神学的立場をどのように位置づけるか、という問題に、否応なく向き合わされることになったのである。

そして、十六世紀後半から十七世紀にかけてのプロテスタントの世界宣教をめぐる議論において最も特徴的なことは、プロテスタント神学者たちが、「カトリック宣教師によってもたらされた非ヨーロッパ地域についての情報」を再利用しつつ、それを継ぎ合わせ、再解釈することによって、カトリックのそれとは異なる独自の「世界認識」と「世界宣教観」を組み立てていったことである。従来の研究では、こうした「プロテスタントの世界宣教観の形成」と「カトリックの宣教情報の再利用」との関わりについて、十分な検討はなされてこなかった。本稿では、プロテスタント神学者による「カトリックの宣教情報の再解釈」の具体例として、1597年に刊行されたドイツのルター派神学者フィリップ・ニコライの著書『キリストの王国についての史録』のなかに見られる「イエズス会日本書翰の引用」に光を当て、この書翰がニコライの世界認識と世界宣教観にどのような影響を及ぼしているかを検討するとともに、ニコライによって紹介されたこの書翰が、その後十七世紀半ばに至るまで、ルター派神学者たちの論争書・説教・大学所見のなかで繰り返し引用され、この時期のドイツ・ルター派の世界宣教観の骨格を形作る《議論の素材》となっていったことを明らかにしたい。

具体的には、続く（2）で、近世のプロテスタ

ント神学者たちの議論の出発点をなしているルターの世界宣教観について、そして（3）で、カトリック神学者たちのルター派への論難と世界宣教との関わりについて、それぞれ概観を行った後に、（4）で、世界宣教をめぐるニコライの議論のなかでイエズス会日本書翰の引用がどのような役割を演じているかを分析し、さらに（5）で、ニコライの議論と彼による書翰の引用が十七世紀のドイツ・ルター派にどのように継承されていったかを跡づけてみたい。

（2） M・ルターの『昇天日の説教』（1522年）における世界宣教観——「福音（神の言葉）の情報拡散」としての世界宣教

ルターが1517年10月にザクセン選帝侯領のヴィッテンベルクで『95箇条の提題』を発表し、宗教改革の口火を切ると、宗教改革の波は瞬間にドイツ（神聖ローマ帝国）の各地に広まり、ルターはローマ教皇庁との熾烈な対立関係に陥っていった。その結果、1521年1月にはローマ教皇レオ10世がルターを破門に処し、同年5月には神聖ローマ皇帝カール5世がルターへの帝国追放処分を布告した。この時期にルターはザクセン選帝侯フリードリヒの手でヴァルトブルク城に匿われたが、1522年3月、ルターはヴァルトブルク城からヴィッテンベルクへと帰還した。それから約2カ月半ののち、ルターが5月29日にヴィッテンベルクにおいてドイツ語で行った『昇天日の説教』⁽⁷⁾は、ルターの世界宣教観の特徴を最もよく示す史料として、従来の研究のなかで好んで取りあげられてきたテキストの一つである。

『マルコによる福音書』16章14～20節についての講解として行われた、この説教のなかで、ルターは、同15節の「全世界に行って、すべての

造られたものに福音を宣べ伝えなさい（説教しなさい）(predigen)」⁽⁸⁾という記述に解説を加え、「福音 (Euangelium) とは、キリストの復活についての説教に他ならない。即ち、それを信じる者は救われるが、そうしない者は滅びの宣告を受ける」⁽⁹⁾と述べたのちに、(彼の考える)「福音の宣教(説教)」の特質を、次のような言葉で言い表している。

「[…] ここに信仰の本質 (die natur und art des glaubens) を見て取ることができる […。]。なぜならば、信仰は、^{なんびと}何人をも福音へと強制したり、強迫したりせず、各人を自由なままにし (ain yeden frey lassen)、各人の自由な判断に委ねる (jms haim stellen) からである。即ち、信じる者は信じるがよい、来る者は来るがよい、[信仰の] 外に留まる者はそこに留まるがよい、と。それゆえに […。]、彼 [ローマ教皇] が僭越にも権力によって人々を信仰へと追い立てようとする、そのことによって、教皇は誤りを犯し、不正を行っている […。]。なぜならば、主 [キリスト] は弟子たちに対して、福音を説教すること以外には何も命じなかったからである。弟子たちも、その通りのことを行い、福音を説教し、それを聞きたいと欲した者にはそれを聞かせた。そして彼らは、『信ぜよ、さもなくば私はお前を殺すであろう』などとは言わなかった。」⁽¹⁰⁾

ここでルターは、「信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける」(『マルコによる福音書』16章16節) というイエスの言葉を「信じるか否かを各人の自由な判断に委ねようとする姿勢の表れ」と解釈し、「宣教」の役割を「福音を説教し、人々に聞かせること」だけに限定しようとしている。そして、「信じる自由」

のみならず「信じない自由」をも尊重するイエスの姿勢と対比させるかたちで、「権力」や「剣」を用いて人々に信仰を強制しようとする当時のローマ教皇の振る舞いに、ルターは根本的な疑問を投げかけているのである。こうしたルターの発言には、かつてヤン・フスを焚刑に追いやった「異端審問」の制度への批判のみならず、「キリスト教の防御と拡大のために異教徒と剣をもって戦うこと」を奨励する当時のローマ教皇庁の「十字軍思想」への異議申し立てが見て取れる⁽¹¹⁾。

このように「宣教」の役割を「福音の説教」に限定したうえで、ルターは、これに続く箇所で、「全世界へと赴け」という《イエスが使徒たちに与えた言葉》の有効性について独自の議論を展開する。

「『全世界へと赴け (Get hin in die gantze welt)』という、この言葉からは、一つの疑問が生じる。[…。] なぜならば、使徒たちは全世界にまで赴くことはなかったからである。使徒たちの誰一人としてこの我々のもと [ドイツ] を訪れることはなかったし、我々の時代においてもなお、異教徒たち (heiden) がそこに住み、彼ら [異教徒たち] に誰も説教を行ったことのない、多くの島々 (vil inseln) が発見されてきた。しかしそれにもかかわらず、聖書は『彼ら [使徒たち] の声は全世界に発せられた (jr stimm ist in die gantze welt außgangen)』⁽¹²⁾と述べているのである。[この疑問に対する] 答え [は以下の通りである]。彼らの説教は全世界に向けて発せられたけれども、しかしそれはまだ全世界に到達してはいないのである。その通信 (außgang) は、開始され、発信されたけれども、しかしそれはまだ完了し達成されてはおらず、終わりの日 (den junngsten tag) が訪れるときまで、より広く、より遠くへと、外に向かっ

て説教され続ける。[…] あたかも、一つの石 (ain stain) を水の中に投げ入れたときのように。それ [投げ入れられた石] はその周囲に波紋 (bulgen und kreyß) […] を作り、その波はうねりながら、より遠くへと広まり、向こう岸に達するまで、一つの波がまた別の波を波立たせてゆく。そしてその [水の] 中央が風いでも、波はまだ静まってはおらず、独りでに (für sich) 歩みを進めてゆくのである。説教もそれと同じである。それは使徒たちによって開始され、常に続けられ、説教師たちによって世界のあちらこちらにもたらされ、[しばしば] 放逐され迫害されながらも、それまでそれを聞いたことのなかった人々に向けて告知され続けるのである。たとえ、その途上において、それ [説教] が途絶え、純然たる異端 (eytel ketzerey) と化してしまうことがあったとしても。」⁽¹³⁾

このようにルターは、イエスから使徒たちに託された「世界宣教」の使命が「使徒たちによって着手されながらも未だに果たされていない約束」であることを強調し、「世界宣教のプロセス」を「福音の説教が全世界へと伝播・拡大してゆくプロセス」として位置づけている。そしてそこで注目すべきことは、「独りでに歩みを進める波」の比喻からも見て取れるように、ルターが「福音の伝播・拡大のプロセス」を、特定の教会や教派の組織的な宣教活動には還元しえない、あるいはそこから独立した「福音（あるいは神の言葉）の自動的かつ自生的な《世界への情報拡散》のプロセス」と捉えていることである。「世界宣教の途上で説教が異端化してしまう可能性」をも受容する彼の発言から窺えるように、「宣教の担い手」を制度的・教派的に資格づけ、「宣教」を組織的に展開しようとする発想は、ルターには希薄である。そして

文中の「終わりの日（最後の審判の日）」への言及からもわかるように、ルターにとって、「全世界への福音の伝播・拡大」のプロセスの連続性は、究極的には終末論的・救済史的な歴史観に基づく《神の御手への信頼》によって担保されているのである⁽¹⁴⁾。

(3) 1580年代のローマ・カトリック神学者たちの世界宣教観とルター派への論難——「ローマ教会及び教皇権の制度的拡大」としての世界宣教

非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教に関する情報は既に宗教改革が始まる以前からヨーロッパにもたらされていたが、こうした情報をヨーロッパのカトリック神学者たちが《宗教改革派（プロテスタント）に対する論難の材料》として積極的に利用するようになるのは、1580年代に入ってからのことである。

《非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教の情報》を取り入れたカトリックによるプロテスタントへの神学的論難の典型的スタイルは、イタリアのカトリック神学者ロベルト・ベラルミーノの著書『現代の異端者たちに対抗するための、キリスト教信仰についての諸論争に関する […] イエズ会士ロベルト・ベラルミーノの論証』のなかに見出せる。1586年にドイツのインゴルシュタットで刊行された同書の第1巻の「教会の徴 (notis Ecclesiae) について」と題された章で、ベラルミーノは、「教会の真正さの徴」の一つとしてその「規模の大きさ」を挙げ、「真にカトリック的な教会は、全ての時代を包摂するのみならず、また、全ての場所 (omnia loca), 全ての諸国の民 (omnes nationes), 全ての人類の諸民族 (omnia hominū genera) を包摂しなければならない」⁽¹⁵⁾と述べ

たのちに、《非ヨーロッパ地域へのローマ・カトリック教会の領域的拡大》を《ルター派の活動領域の狭さ》と対比させながら、「ルター派の立場の脆弱さ」を次のように論難している。

「ローマ教会 (Ecclesiam Romanam) は、全イタリア及びスペインに加えて、そしてまた […] ガリア [フランス]、ドイツ、イングランド、ポーランド、ボヘミア、ハンガリー、ギリシア、シリア、エチオピア、エジプトに加えて、まさに新世界において異端者たちに汚されていない諸教会を有している。世界の4つの地域の全てに、即ち、東方ではインド (Indiis) に、西方ではアメリカ (America) に、北方では日本 (Iaponia) に、そして南方ではブラジル (Brasilia) とアフリカの外縁部 (exteriore parte Africae) に。それに対して、異端的な諸分派は、全世界を占有することなど到底できず、実質的にその半分の地域しか占有してこなかった。[…] ルター主義者たちの異端は海を越えたことはなく、アジア、アフリカ、エジプト、ギリシアを目の当たりにしたこともない。このことから、1580年に編纂されたルター主義者たちの和協書[『和協信条書』]の序文の冒頭部分に記されている内容が明白な虚偽であることが理解できる。なぜならば、そこでは、[ルター派の信仰告白である] アウクスブルク信仰告白が全世界に広まり、万人の口と話題に上り始めた、と述べられているからである。ところが、全世界の3つの地域のうちの2つのより大きな地域、即ちアジアとアフリカは、その信仰告白の名前さえ耳にしたことがないのである […]。』⁽¹⁶⁾

ドイツ [神聖ローマ帝国] のルター派が1580年に公刊した信条集 (『和協信条書』) の序文で、

ルター派の指導者たちは、ルター派の信仰告白である『アウクスブルク信仰告白』の神学的権威を誇示するために、「[この信仰告白は] 全世界 (totum terrarum orbem) に […] 広まり、万人の口と話題に上り始めた」⁽¹⁷⁾ という些か大げさな表現を用いた。ベラルミーノは、その表現がいわば「誇大宣伝」に過ぎず、アウクスブルク信仰告白の知名度の高さは実際には「ヨーロッパ世界の内側」に限定されたものであることを露見させたのである。このように、当時のカトリック神学者たちは、非ヨーロッパ地域に宣教の足場を持たないプロテスタント諸派の「活動領域の狭さ」を指弾しつつ、カトリックの世界宣教の成果をアピールすることで、「全世界を包摂する教会」としてのローマ・カトリック教会の優位性を誇示することができた。

そしてこのようなカトリック神学者たちの議論において特徴的なことは、彼らが「非ヨーロッパ地域での宣教活動」と「ローマ教皇庁」との組織的・制度的な繋がりを絶えず強調し続けたことである。「世界宣教」を特定の教会組織・制度からは自立した「福音の自動的・自生的拡散」と捉えたルターとは対照的に、カトリック神学者たちは「世界宣教」を「カトリックの教義に基づくローマ教会の全世界への拡大」として位置づけ、非ヨーロッパ地域での宣教の成果を「ローマ教皇の功績」として讃えることに努めた。こうした配慮は、十七世紀前半に至るまでローマ教皇庁が非ヨーロッパ地域での宣教活動に直接に介入する手立てを持っていなかったがゆえに、より一層重要であった。世界宣教をローマ教皇庁が集権的に管轄するための新たな制度の創設のプランは十六世紀から度々浮上し、それは1622年に布教聖省 (Congregatio de Propaganda Fide) の設立というかたちでようやく実を結んだが、それ以前は、非ヨーロッパ

地域での宣教の方針はスペインとポルトガルの王家やそれぞれの修道会の判断に委ねられており、「ローマ」と「非ヨーロッパ地域での宣教」との結びつきは必ずしも自明なものではなかった⁽¹⁸⁾。だからこそ、ベラルミーノを始めとするカトリックの論争家たちは、「ローマを中心とするカトリックの世界秩序」のイメージをヨーロッパで宣伝するために、非ヨーロッパ地域での宣教活動を「ローマ教皇の功績」として描き出すことに腐心し続けたのである。

こうしたカトリックの論争家たちに、宣伝のための絶好の機会を提供したのが、1584年～1586年の「日本からの天正遣欧使節の来欧」と「使節たちのローマでの教皇との謁見」という出来事であった。なぜならば、それは「非ヨーロッパ地域での宣教」と「ローマ」との結びつきを証明する出来事であるのみならず、非ヨーロッパ地域の諸民族が「ローマを中心とするカトリックの世界秩序」に服属したことを象徴的に示す出来事だったからである。それゆえに、この出来事は当時のヨーロッパで注目を集め、「日本からの使節の来欧」を主題にした夥しい数の印刷物が出版されるとともに、この使節に関する情報は、プロテスタント信徒をカトリックに改宗させるための対抗宗教改革的な《改宗の道具》としても用いられた。

オーストリアのイエズス会士ゲオルク・シェーラーは、1586年の春、ある貴族領のルター派領民をカトリックに改宗させるためにドイツ語で説教を行った。その説教のなかで彼は、「新世界及び新たに発見された異教的な島々 […]」の強大な王と諸侯が […] ローマ教会に所属する司祭たちから洗礼を施され、 […] 昨1585年には、4人の王侯使節が、 […] 日本島の […] 諸王国から […] 陸路と海路による3年に亘る旅を経てローマへと到来し、豊後の王フランキスクス [大友宗麟]、

有馬の王プロタジウス [有馬晴信]、大村の公爵バルトロメウス [大村純忠] […] の名においてローマ教会の教皇座に […] 服従を示した。 […] 異教徒の王や諸侯が、遠方から […] ヴイッテンベルクに、ライプツィヒに、テュービンゲンに、またあるいはいずれかのルター派の都市 […] に到来し、そこで […] 和協信条書やアウクスブルク信仰告白への記名を希望する、などということが、これまでにあっただろうか？」⁽¹⁹⁾ と聴衆に語りかけた。シェーラーは、《ルター派の世界的知名度の低さ》と対比させながら、ヨーロッパから遠く離れた日本の王や諸侯までもが進んで《ローマ教皇を中心とする世界秩序》に服属したことを強調したのである。

シェーラーは、1584年に出版したドイツ語パンフレットのなかでも、「我らの時代において、東方のマラッカとゴアとコモリンに、西方のアメリカに、北方の日本に、南方のブラジルや […] エチオピア、またそれ以外の最も強大 […] な諸国・諸王国・島々に福音 (Euangelium) を植え付けたのは、一体誰だろうか？」⁽²⁰⁾ と問うた後、「教皇は、これら全ての諸民族に対して、聖パウロとともに『福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです (geboren)』」⁽²¹⁾ と言うことはできないだろうか？ 説教師と司祭は […] これら全ての場所 […] にローマから派遣された […] のだから」⁽²²⁾ と述べ、「我々はローマ教皇を [全世界のカトリック信徒の] 母 (Mütter) と見なしている」⁽²³⁾ と記している。このシェーラーの発言には、カトリックの世界宣教を「ローマ教皇権の全世界への制度的拡大」として位置づけようとする当時のカトリックの論争家たちの姿勢が反映されているのである。

(4) P・ニコライの『キリストの王国についての史録』(1597年)——イエズス会日本書翰の再解釈に基づく脱《宗派主義》的な世界宣教観の形成

「世界宣教の成果」を題材にしたカトリック神学者たちによるルター派への論難が繰り返されるなか、「世界宣教」の問題に関するルター派の側の神学的立場が確立してゆくのは十七世紀前半のことである。そしてこの時期のルター派神学者たちの世界宣教観に決定的な影響を及ぼしたのは、ドイツのヴェストファーレン地方の都市ウンナのルター派牧師であった神学者P・ニコライが1597年の著書『キリストの王国についての史録』[以下『キリストの王国』と略]の第1巻⁽²⁴⁾に記した《世界宣教の歴史》に関する地誌学的記述であった。

この著書に「預言者たちと使徒たちの予言に符合せる」という副題が付けられていることから窺えるように、この書の主たる目的は、『ダニエル書』を始めとする聖書テキストの記述に依拠しながら「最後の審判の日の到来」に至るまでの世界の《終末論的な歴史》を叙述することにあつたが⁽²⁵⁾、この著書の第1巻の第1章で、ニコライは、夥しい数の歴史的・地誌的資料や世界宣教に関する記録を援用しながら、《非ヨーロッパ地域におけるキリスト教の広まり》について詳細な記述を行った。その記述が、のちの時代のドイツ・ルター派の世界宣教観に大きな影響を及ぼしたのである。『キリストの王国』はラテン語で記されていたが、そのドイツ語訳(ゴトハルト・アルトゥスによる抄訳⁽²⁶⁾)が1598年に出版され、ラテン語版は1610年代に至るまで、そしてドイツ語抄訳版は1650年代に至るまで、再版を重ねた⁽²⁷⁾。

『キリストの王国』におけるニコライの地誌

学的記述の大きな特徴は、「キリストの王国(Regnum Christi)」という救済史的な概念⁽²⁸⁾に依拠するかたちで、個々の教派や教会制度の枠組みを超えた「キリストの王国の全世界への拡大」⁽²⁹⁾のプロセスに光が当てられていることである。ニコライは、イエス・キリストの時代にエルサレムに芽生え、その後、使徒たちによって各地に広められた(キリストを信仰する人々の総体としての)「キリストの王国」が、ローマ・カトリックによって宣教が行われたアジアやアメリカにも、またモスクワ大公国の正教徒やエチオピア帝国のエチオピア正教徒の間にも、そればかりかオスマン帝国のイスラム教スルタンの支配下にある諸教会のキリスト教徒たちの間にも広く行き渡っていることを、様々な記録を紹介しながら論証してゆく⁽³⁰⁾。こうしたニコライの視点には、特定の教派や教会制度から自立した「福音の自動的・自生的拡散」を「世界宣教」と捉えたルターの視点との連続性が垣間見える。だが、ニコライを現代的な意味での「エキュメニカルな神学者」と見なすことはできない。なぜならば、彼は、典型的な「ルター派正統主義(Lutherische Orthodoxie)」の論争家⁽³¹⁾として、その生涯を通じてカトリックやカルヴァン派を論難し続けたからである。それでは、『キリストの王国』に記された「個々の教派や教会制度の枠を超えた《キリスト教の全世界への拡大》」という世界認識は、一体どのようにして育まれたのだろうか。

この問題を解き明かすための糸口の一つは、彼が生きた時代の特異な歴史・思想状況に見出せる。ニコライの生涯は、1600年頃のヨーロッパ、とりわけドイツを覆っていた「宗派対立」と「危機」の影に隈取られている⁽³¹⁾。

ニコライは、1556年にヴァルデック伯領のメンゲリンクハウゼンで生まれ、ヴィッテンベル

ク大学などで学んだ後、1580年代から1590年代にかけてヴェストファーレン地方の幾つかの都市で牧師や説教師を務めた。この時代のヴェストファーレン地方は、十六世紀のドイツ（神聖ローマ帝国）で進行したカトリック・ルター派・カルヴァン派（改革派）の「宗派形成（Konfessionsbildung）」⁽³²⁾とそれぞれの宗派（教派）間の「宗派对立」が複雑な社会対立を生み出した地域だった。この地域の多くの都市では、カトリック住民とルター派住民が反目が続けていたが、1566年にスペインの支配下にあったネーデルラントで《カトリックの異端審問に抵抗するカルヴァン派住民の反乱》が勃発し、1568年にオランダ独立戦争が始まると、その戦乱はヴェストファーレン地方にも飛び火した。多くのカルヴァン派避難民がネーデルラントからこの地方に流入し、スペインからネーデルラントに派遣された討伐軍は、しばしばヴェストファーレン地方の領邦や都市にまで侵攻した。それらの領邦や都市では、スペイン軍の攻略を受けるたびに、《対抗宗教改革的な反プロテスタント政策》が導入された⁽³³⁾。そしてニコライもまた、彼が居住する都市がスペイン軍に占拠されるたびに、カトリックによる迫害を逃れるため、他の都市に移り住むことを余儀なくされた。そうしたなかで、ニコライは、ルター派正統主義の論客として、カトリックに対してのみならず、カルヴァン派に対しても、論争を挑み続けた⁽³⁴⁾。

「宗派对立と戦争の惨禍」とともに、ニコライの生涯に纏い付いているのは、「疫病の流行」とそれによってもたらされた「死」の影である。ニコライは、1596年にウンナに移住したが、その翌年の夏、ドイツ北西部一帯をペストが襲い、ウンナの都市人口の3分の1に当たる人々（約1400人）がこの病によって次々と命を落とした。

ニコライは死者たちの埋葬に明け暮れ、彼自身の2人の姉妹と1人の同僚の牧師もまた、死者の列に加わった⁽³⁵⁾。ニコライは、1601年にハンブルクの牧師となったが、1605年から1606年にかけてハンブルクでも疫病が流行し、2000人以上の住民が犠牲になっている。そしてニコライは1608年にハンブルクで没した。

このようにニコライの生涯は「宗派对立に伴う混乱」と「疫病による死の影」に付きまといわれている。そうした「時代の危機」のなかで、ニコライは、カトリックやカルヴァン派に対する論争書の執筆と並行して、それとは全く性質を異にする書物を著している。それは、「時代の混乱」と「死の不安」のなかにあって読者に「慰め」と「心の平安」と「信仰への確信」を与えることを目的とした著作であり、一般に「信心書（Erbauungsliteratur）」と呼ばれるジャンルに位置づけられる書物である⁽³⁶⁾。ニコライが1599年に発表した『永遠の生の喜びの鑑』⁽³⁷⁾は、ペスト禍の恐怖のなかにあって「死の不安」に怯える人々に「死を超えた永遠の生」についての確信を与えるために著された著作で、この書のなかでニコライは、中世の神秘主義や瞑想文学の観念を援用しつつ、「死後の永遠の生（das ewige Leben）」を「神と人間との間の人格的關係」として描き出している。この著書に収められたニコライ作の二曲の賛美歌（「あかつきの空の美しい星よ」「起きよ」と呼ぶ声）は、ドイツ・コラルの傑作としても名高い⁽³⁸⁾。

そしてこのようなニコライの著作活動と1597年の『キリストの王国』の記述を重ね合わせてみると、『キリストの王国』の第1巻の第1章の「キリストの王国の全世界への拡大」についての記述そのものが「時代の混乱のなかにあって読者に心の平安と信仰への確信を与えること」を目的に記

されたものであったことがわかる。『キリストの王国』の冒頭近くで、ニコライは次のように記している。

「[...] ドイツ人, ポーランド人, ハンガリー人, イタリア人, ガリア人 [フランス人], スペイン人, ブリテン人 [イギリス人], デンマーク人, スウェーデン人の間での今日のキリスト教会の状況について, そしてそこで人々が [...], 論争者たちの様々なグループに分断され, 切り裂かれ, [...] 信仰の争い (fidei controuersias) を播き散らしている [...] ことについて, [...] ここで語るつもりはない。[...] 私は, 北方の諸民族やアジア, アフリカ, アメリカ, 広大な大洋の島々にまで至る今日のキリストの王国の成長について語るつもりである。キリスト的信仰を愛する読者たちが, [ヨーロッパでの] 教会の紛争 (Ecclesiasticis contentioneibus) に決してその心 (animo) を奪われることなく, キリスト教の円環の大きさを認識し, 神聖なる王国の拡大と [...] 成果を熟視することができるように。」⁽³⁹⁾

この一文には、ニコライが「個々の教派や教会制度の枠を超えた《キリスト教の全世界への拡大》」についての記述を行うに至った歴史的・思想的背景がよく示されている。即ち、ニコライをこうした記述へと向かわせたのは、「ヨーロッパ世界の内側で繰り返される宗派対立と教会紛争」への批判的省察であり、「そうした対立と紛争によってヨーロッパの人々の信仰心が動揺し, 失われつつあること」への洞察であった。そのような危機のなかで人々に慰めと心の平安と信仰の確信を与えるために、ニコライは「ヨーロッパ世界の外側でのキリスト教の拡大」に関する詳細な記述

を残したのである。

だが、「個々の教派や教会制度の枠を超えた《キリスト教の全世界への拡大》」という世界認識に到達するためには、「教派や教会制度の相違を超えた《世界各地のキリスト教の共通性》」についての洞察が必要不可欠である。それでは、ニコライはそうした洞察をどのようにして獲得したのだろうか。そこで重要な役割を演じたのが「世界宣教に関する記録」であった。つまりニコライは彼が収集した「世界宣教に関する様々な記録」を継ぎ合わせ、再解釈してゆく過程で、「教派を超えた《キリスト教の共通性》」についての視座を獲得していったのである。とりわけニコライに重要な着想を与えたのは、1560年代以降、ドイツで数多く出版された「東方地域でのイエズス会士たちの宣教活動に関する記録」だった⁽⁴⁰⁾。

それらの記録を読み進めてゆくうちに、ニコライは、ある驚くべき事実に気がついた。ヨーロッパのカトリック神学者たちが「世界宣教」を「ローマ教皇権の全世界への拡大」として喧伝しているのとは裏腹に、東方地域から書き送られてきた「イエズス会士たちと現地の住民との語り合い」の記録のなかには「ローマと教皇制度」に関する言及が殆ど現れてこないのである。ニコライは、驚嘆の念をこめて、『キリストの王国』のなかで次のように述べている。

「敬虔なる読者たちよ、どうか以下のことを心に留めておいてほしい。イエズス会士たちが、アラビアの人々やインドの人々や [...] 島々の諸民族を改宗させる際に、その人々に対する最初の振る舞いと会話と教育において、次のような方法を用いていることを。即ち、もしも [...] ヨーロッパの彼ら [イエズス会士] の学校や教会でそうした方法をそのまま遵守し [...] たな

らば、スペインやイタリアであれば、間違いなくルター主義的（Lutheranis）であると見なされ、[…] 焚刑を免れることができないような方法を。なぜならば、[…] インドの人々をキリストの宗教へと導くために、彼らは、ローマ教会の権威や人間的伝承、あるいはミサや煉獄や業による功績やローマの贖宥状販売から「話を」始めるのではなく、[…] 素朴なかたちで次のことを説いているからである。即ち、最初の先祖たちの墮罪について、そしてその結果生じた全人類にまで及ぶ罰について、さらに唯一なるキリストを通じて為された我々への無償の贖罪について、そして信仰によって「キリストと」繋がれ、その「キリストの」御名によって洗礼を受け取ることができることを。」⁽⁴¹⁾

この記述の欄外に印刷された注には、「イエズス会士たちは、インドの人々と東方の諸島民（indorum & insulanorū orientalium）の改宗に着手する際、自分たちをルター派（Lutheranos）のように、あるいは福音主義者（Euāgelicos）のように見せかけている」⁽⁴²⁾と記されている。つまり、イエズス会士たちが東方地域で宣教を行う際に、イエズス会士たちは、宗教改革者によって否定された要素（「ローマの権威」「教皇制度」「カトリック的典礼・伝承」「功績主義」「贖宥状販売」など）を排除して、ヨーロッパでルター派が説教しているのと殆ど変わらない内容を現地の異教徒たちに語り聞かせている——そうした驚くべき事実を、ニコライは「発見」したのである。

そしてニコライをこの「発見」へと導いたのは、1通のイエズス会日本書翰であった。前述の引用箇所が続く部分でニコライは、「私が作り話をしているなどと思われることがないように、私は、ヨハネス・バプティスタ・モンティウス⁽⁴³⁾と

いうイエズス会士自身の言葉をここに付記しておきたい。それは1564年に日本の都市である豊後から（ex Bungo vrbe Iaponio）ミカエル・トゥレンシスに宛てて記されたものであり、そこには次のように書かれている」⁽⁴⁴⁾と述べ、その後の箇所では、1564年10月11日に日本の豊後で記されたモンティウスの書翰の一部を引用している。この書翰は、1571年にドイツのディリンゲンで刊行されたラテン語版のイエズス会宣教記録集（『東方地域でイエズス会によって成し遂げられた事柄の「…」記録』）に収録されている⁽⁴⁵⁾。以下に、その書翰のうち、ニコライの『キリストの王国』に引用されている箇所を訳出してみたい。

「福音（Euangelium）は、今、広く遙か遠くまで行き渡り、無傷なまま民衆（vulgus）の間で受け入れられ、神の恩寵によって、まったく途切れることなしに常に誰かが洗礼へと導かれてくる。さて、我々が彼らと話すときの方法（Ratio ... cum illis agendi）は、次のようなものである。まず始めに、彼らがいかなる宗派に属しているかを尋ねた後、彼ら自身が名前を挙げた宗派だけでなく、それ以外の日本の全ての諸宗派（reliquae omnes Iaponicae sectae）をも、多くの説明を用いて論破し、それら「日本の諸宗派」の力と助けによっては彼らが永遠の救済（aeterna salute）に決して与れないことを彼らに理解させる。そして彼らがそのことを受け入れたときに、無から全体を生み出した唯一なる万物の創造者（vnum rerū omniū opificē）が存在することを教え、さらに、墮天使たち（Angelos desertores）と人間（hominem）以外の全てのものは「神によって定められた」務め（officio）を果たしていること、[ところが人間は] その罪（culpa）のために創造主であ

る神がその者〔人間〕をそこに位置づけた最初の状態 (primo ... statu) から脱落してしまったこと、そしてその者〔人間〕が諸々の自然法 (naturae legibus) と正しい理性 (rectaeque rationi) に反していることを〔彼らに〕教える。それに続いて彼らは、神 (Deum) が三位にして一体であること、そしてその〔神の〕命令を前述の最初の人間 (primus ille homo) が無視してしまったことを知らされる。そして、無限の権威と神意 (infinitae maiestati ac numini) に対して侮辱 (iniuria) がなされた場合には、それと同じだけの無限の賠償 (infinitam ... satisfactionem) が科されることになり、しかも人類 (genus humanum) やその他の自然の被造物がそれ〔無限の賠償〕を支払うことなどまったく不可能であったために、三位一体の第二のペルソナ (secundam Trinitatis personam) 〔子なる神、キリスト〕が、我々の人間的性質 (humanitatem nostram) をわざわざ自発的に引き受け、身に纏ってくれたこと、そしてその人間かつ最も無垢なる神 (homo simul & Deus innocentissimus) が、彼のかけがえのない血と無残な死によって、〔本来〕我々の悪行に科されるべき罰 (poenam) を〔代わりに〕贖い、それによって我々を全能なる神 (omnipotentis Dei) との和解へと導いてくれたことを〔彼らは知らされるのである〕。彼らにこれらすべてを明瞭かつ十分に説明し、彼らの質問に適切に答え、生じうるかぎりのあらゆる疑念が彼らの心から取り払われたとき、そして彼らに《定められた祈祷式文》⁽⁴⁶⁾ と《十戒》が述べ伝えられたときに、彼らは野蛮な儀式と迷信を捨て去ることを約束する。最後に、聖なる洗礼の力と神秘について彼らに説明がなされ、その結果、彼らはキリストに誓い、洗礼を

授けられるのである。」⁽⁴⁷⁾

このモンティウスの書翰に、ニコライは次のようなコメントを付している。

「バプティスタ・モンティウス […] の話が真実であるとすれば、次のことに疑いの余地はない。即ち、かつてパリサイ主義者たちと律法主義者たちが、彼ら自身は足を踏み入れることのなかった《救済のための真実の道》を他者に示し、説いてみせることができたのと同じように、イエズス会士たちも、彼ら自身は教皇主義者であるにもかかわらず、東方の異教徒たち (orientaliū Paganorū) の改宗に際して、[…] 以下の範囲内では、非難の余地のない仕事をしているのだ。即ち、彼らが、《神》と《万物の創造》と《天使たちと人類の墮罪》と《神の子の受肉》と《唯一なるキリストを通じて為された世界の贖罪》と《彼〔キリスト〕による十全なる賠償》についての教説を素人の庶民 (rudem plebeculam) に素朴なかたちで普及させ、[…] 教皇主義的な伝統についての言及を避け、ただキリストの宗教の要点 (praecipuis Christianae religionis capitibus) と十戒と使徒信条と主の祈りだけを教わった者たちに洗礼を施している、その限りにおいては。」⁽⁴⁸⁾

このようにニコライは、「モンティウスが日本から書き送ったカトリック宣教の記録」をカトリック神学者たちとは異なる視点から再解釈することによって、ヨーロッパで喧伝されているとは異なる「東方地域でのカトリック宣教の実情」を読み取り、日本の庶民を前にしたイエズス会士たちの具体的な語りの内容のなかに、教派の違いを超えた「ルター派との神学的な共通項」を発見

したのである。

ニコライの『キリストの王国』のなかにモンテウスが日本から書き送った書翰の一部が引用されている、という事実は、教会史家 W・ヘスの研究書『フィリップ・ニコライにおける宣教思想』のなかで既に明らかにされている⁽⁴⁹⁾。しかしながら、この書翰がニコライの世界宣教観の《立論の根拠》となっていることについて、従来の研究では十分な指摘がなされてこなかった⁽⁵⁰⁾。そして、東方地域に関するニコライの地誌学的叙述のうち、インドに関する記述⁽⁵¹⁾や中国に関する記述⁽⁵²⁾の分量と比較すると、日本に関する記述はごく簡略なものである。即ちニコライは、日本に関しては、「アジアとアメリカのそれぞれの領域の中間に位置し、マルコ・ポーロによってジパング (Zipangri) と呼ばれた […] 日本 (Iaponia) は […] 諸々の諸王国 (regna varia) に分裂し、絶えざる戦争に苦しめられている、と [記録に] 書かれている。その一方で、[日本は] 数多くの都市や町や村を有し、[…] 異教哲学者たちの多くのアカデミー (multis ... gentiliū Philosophorū Academys) によって著名であり、そのそれぞれが 3500 名かそれ以上の数の弟子たちを集めている、と言われており、それゆえに非常に多くの町々では女性たちも男性たちも文書に精通している、とされる」⁽⁵³⁾とだけ記している。しかしそれにもかかわらず、モンテウスの日本からの書翰がニコライの議論にとって最も重要な《立論の根拠》であったことは、『キリストの王国』の第 1 巻・第 1 章の結論部でニコライが再びモンテウスの書翰を引き合いに出しつつイエズス会士の宣教方法の独自性に言及していることから明らかである⁽⁵⁴⁾。そして、そうした議論を踏まえながら、ニコライは、「カトリックの同調者」という批判をかわすように、次のような結論を導き出

す。

「人は次のように問うかもしれない。 […] 《ローマ風の伝統と教皇主義的な位階制の種を播き散らすこと》を私が《キリストの宗教の成長》と見なしてしまっているのではあるまいか […] と。[改行] これに対して、私は次のように答えたい。(それ [キリストの王国] を集積し、拡大させるために) 神が定め […] た《キリストの王国の媒体 (Regni Christi media)》そのものと《人間たちによって混入させられた […] 誤り (errores ... qui ab hominibus admiscentur)》とを区別すべきである、と。聖書のテキスト、十戒、主の祈り、そして洗礼と主の晩餐のサクラメントは、それを用いて教会を根付かせ、成長させるための《媒体》である。」⁽⁵⁵⁾

このようにニコライは、「(聖書を始めとする) キリスト教の拡大を支える主要な媒体」と「それ以外の副次的要素」とを峻別し、前者がヨーロッパのルター派の間でだけでなく、非ヨーロッパ地域でのカトリックの宣教活動のなかにも、さらにはモスクワ大公国及びエチオピア帝国のキリスト教徒たちやオスマン帝国支配下の諸教会のなかにも共通に見出されることを示すことによって、教派や教会制度の枠を超えた「キリストの王国の全世界への広まり」に読者の目を向けさせようとした⁽⁵⁶⁾。そして、同時代のヨーロッパのカトリック神学者たちが「組織的な宣教活動によるローマ教会の全世界への制度的拡大」を世界宣教と見なしたのとは対照的に、ニコライは、「世界各地の多様なキリスト教的営為」のなかに「神学的な共通項」を発見し、それらを「キリストの王国の全世界への拡大」として物語ることによって、彼の世界宣教観を確立した。その意味において、彼の

世界宣教観は、「実践的な性格」のものではなく「記述的な性格」のものであった。しかしまたそれゆえにこそ、それぞれの教派が自らのテリトリーの拡大を追い求め、果てしのない宗派対立が繰り返される「宗派主義（Konfessionalismus）」の時代の只中にありながら、ニコライは、個々の教派や教会制度の枠組みを超えた「脱《宗派主義》的な世界宣教観」を提示することができたのである⁽⁵⁷⁾。

ニコライの脱《宗派主義》的かつ脱《境界》的な世界宣教観のエッセンスは、『キリストの王国』の第1巻・第1章の末尾の次の一文によく表れている。

「キリストの宗教が、全世界に溢れ出し[…], [地上の] 全ての諸王国の全ての終焉と境界と時代とを乗り越えて、数え切れないほどの異邦人たち（gentes innumeras）のもとに到達したということは、驚嘆すべきこと（mirum）、真に驚嘆すべきことである。」⁽⁵⁸⁾

（5）十七世紀のドイツ・ルター派における《ニコライの世界宣教観》の継承とその変容——説教・論争書・大学所見におけるモンティウスの書翰の再利用

（4）の冒頭でも述べたように、ニコライの『キリストの王国』の記述は、十七世紀のドイツ・ルター派の世界宣教観に決定的な影響を及ぼした。カトリックの神学者たちが「世界宣教の成果」を掲げながらルター派への論難を試みるたびに、ルター派の神学者たちはニコライの記述を参照し、そこから「カトリックの論難に応答するための議論の手がかり」を汲み出していった。そしてそうした作業のなかで、ニコライの記述とともにルター派神学者たちが議論の拠り所にしたのが、『キ

リストの王国』に引用されていた「モンティウスの書翰」であった。1564年にモンティウスが日本から書き送った書翰は、こうした歴史的文脈のなかで繰り返し参照され、再利用され、再解釈され続けたのである。だが、こうした十七世紀のルター派神学者たちによる「モンティウスの書翰の再利用」に関して、これまでの研究では殆ど言及されることはなく、まとまった分析もなされてこなかった⁽⁵⁹⁾。そこでこの（5）では、十七世紀のドイツ・ルター派における「モンティウスの書翰の再利用」の具体的事例を幾つか紹介したい。紙幅の制約ゆえに、踏み込んだ分析は行わず、事例紹介だけに留め、幾つかの重要な論点だけを指摘しておきたい。

「モンティウスの書翰の再利用」の最も初期の事例の一つとして、ザクセン-コーブルク公領の都市アイスフェルトの教区監督であったルター派神学者バルタザール・リヒターの説教におけるモンティウス書翰の引用が挙げられる。リヒターは『ヨハネの黙示録』を主題にした一連の説教のテキストを1602年に説教集としてライプツィヒで出版したが、そこに収録された30の説教のうちの第18の説教のなかで、彼はニコライの『キリストの王国』での地誌学的見取り図をそのまま説教に取り込み、「日本での異教徒の改宗」について、モンティウスの書翰の引用（概要）を織り込みながら、終末論的解釈に基づく議論を展開している⁽⁶⁰⁾。

十七世紀前半の《ルター派のカトリックに対する論難の材料》としてモンティウスの書翰が再利用された例として、ハンブルクの牧師ヨハネス・ミュラーの論争書を挙げることができる。ミュラーは、1631年に刊行した著書『教皇主義的な教師たちがルター派教会に嫌疑をかけるために行った論難に対する根本的な返答と論駁』のなかで、「ルター派はいかなる異教徒をもキリスト

教に改宗させたことがなく、そのことはルター派が《真の教会》ではなく《異端者》であることの証しである」というカトリック側の論難に応答するかたちで、モンティウスの書翰を証拠に挙げつつ⁽⁶¹⁾、イエズス会士たちが非ヨーロッパ地域でルター派と同様の宣教手法を用いていることを指摘し、「[イエズス会士の宣教を通じて、実際には]彼ら[異教徒]は我ら[ルター派]の信仰と宗教に改宗させられているのだ」⁽⁶²⁾と些か強引な主張をしている。また、十七世紀前半のドイツ・ルター派を代表する神学者ヨハン・ゲルハルトも、その浩瀚な論争書『神学の主要概念』⁽⁶³⁾のなかで、モンティウスの書翰を引用しながら世界宣教に関する議論を展開している。

だが、ニコライの議論とモンティウスの書翰が十七世紀のドイツ・ルター派の世界宣教観に及ぼした影響について考察する上で、おそらく最も重要な史料は、1652年4月24日に記された「世界宣教」の問題に関するヴィッテンベルク大学神学部の公式の所見である。この所見は、「ルター派の宗教的方針」に関する貴族からの公式の質問状に答えるかたちで同大学の神学部長の署名を付して作成されたもので、1664年に刊行された『ヴィッテンベルク大学神学所見集成』に収録されている⁽⁶⁴⁾。その所見のなかで同大学の神学者たちは「世界宣教」の問題に関する彼らの神学的立場を3つの論点（3項目）に即して説明しているが、その文中で《ニコライによって引用されたモンティウスの書翰のテキスト》が再び引用されているのである。この1652年のヴィッテンベルク大学所見は、「十七世紀のルター派正統主義の世界宣教観」を体现するテキストとして、十九世紀以来、数多くの研究のなかで論及の対象となってきたが⁽⁶⁵⁾、そこに日本からのイエズス会士の書翰が引用されているという事実はこれまで指摘

されてこなかった。

ヴィッテンベルク大学所見の世界宣教に関する記述の第1項では、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」というキリストの命令は、使徒たちとキリストの弟子たちに対して発せられたものに過ぎず、それゆえルター派の聖職者たちは直接的にはこの命令に従う義務を負っていない、と論じられている。そして第2項では、神は全ての人間に対して「自然の光（das Licht der Natur）」を通して啓示を与え、「アダムとノアと使徒たち」を介して全人類への説教を行わせたのであり、それを無視した者たちは「[神への]無思慮と忘恩」に対する罰として「神のいない暗闇」の状態に留め置かれているのだから、神は最早「それらの諸民族（Völkern）」に対して「一度剥奪したものを返還する（restituieren）」義務を負っていない、という論理が展開されている。さらに第3項では、「世俗の統治権力[政治的支配者]（der Weltlichen Obrigkeit）[...]が[非キリスト教的な]国々と非キリスト教的な諸民族（UnChristliche Völker）を戦争法（jure belli）によって、あるいは、それ以外の許容されうる手段を用いて自らの支配下に置いた場合」には、それらの統治権力がそうした国々でキリスト教を広める義務を負っている、と指摘されている⁽⁶⁶⁾。そしてその第3項の記述のなかにモンティウスの書翰のテキストが現れてくるのである。第3項には次のように記されている。

「そうした義務に従って、スウェーデンとデンマークの王たちは、彼らに服属した野蛮な国々において正しい礼拝を普及させたし⁽⁶⁷⁾、また、スペイン、フランス、イングランドの王たちやオランダ人たちは、彼らの説教師たち

を、新たに発見された島々に、東インドと西インドに「…」今なお派遣し続けている⁽⁶⁸⁾。そして彼ら「派遣された説教師たち」は、彼らの「…」教皇主義的な(Papistische)、あるいはカルヴァン主義的な(Calvinische)「教説」ではなく、我々「ルター派」がその点で彼らと一致(einig)しうのような福音的真理(die Evangelische Wahrheit)とキリスト的敬虔さの共通原則(fundamenta Christianae pietatis)をそこで普及させ、「現地の」人々に教えているのである。イエズス会士たち自身がそうした内容を、そして彼らのなかでもとりわけヨハネス・バプティスタ・モンティウスが1564年に日本(Japonien)からミカエル・トゥレンシスに宛てて「…」記していることを鑑みるならば。」⁽⁶⁹⁾

この記述に続いて、ニコライが『キリストの王国』に引用したモンティウスの書翰のラテン語テキストが紹介され⁽⁷⁰⁾、その後次ようなコメントが付されている。

「もしも今でも依然としてそのままの状態であるならば(Wenn es nun hierbey verbleibet), 我々は彼ら「イエズス会士たち」とそれらの点に関して完全に一致している。なぜならば、イエズス会士たちはこうした教育(information)を通じて、教皇主義者ではなく、ましてやイエズス会士でもなく、我々「ルター派」自身がそうであるのと同じような一人の良きキリスト者(einen guten Christen)を作り出しているからである。」⁽⁷¹⁾

このように、ヴィッテンベルク大学所見は、モンティウスの記述を一つの根拠にしながら、「《非

ヨーロッパ地域でのカトリック宣教師やカルヴァン派宣教師の宣教内容》と《ルター派の神学的立場》の間に《一致》が存在している」との見解を打ち出している。もっとも、「非ヨーロッパ地域におけるカトリック宣教師及びカルヴァン派宣教師の活動内容」や「ヨーロッパ諸国の植民地政策の実態」に関してヴィッテンベルクの神学者たちが当時どれだけ正確な情報を把握していたのかについては、さらなる検証が必要であろう。しかし彼らの得ていた情報がどのようなものであったにせよ、ヴィッテンベルクの神学者たちは、ニコライと同じように、「非ヨーロッパ地域での諸教派の宣教活動」のなかに「教派の違いを超えたキリスト教の共通原則」を見出そうとしている。そして、その「共通原則」を具体的に示すテキストとして、ヴィッテンベルクの神学者たちが《立論の根拠》に据えたのが、モンティウスが1564年に日本から書き送った(そしてニコライによって引用された)宣教の記録だったのである。

しかし、ヴィッテンベルク大学所見の見解とニコライの世界宣教観との間には大きな立場の隔たりが存在している。かつてルターが「世界宣教」を「福音の自動的・自生的拡散」と捉えたのと同じように、ニコライは、「キリストの王国の全世界への拡大」を「《神の御手》による救済史のプロセス」として記述した。ところが、ヴィッテンベルク大学所見では、こうした世界宣教の「救済史的基礎づけ」は後背に退き、その代わりに、世界宣教の主導権は「ヨーロッパ諸国の統治権力」に委ねられている。このような相違点に目を向けると、ヴィッテンベルク大学所見が1648年のウェストファリア条約(ヴェストファーレン条約)の締結の4年後に作成されていることは示唆的である。つまり、三十年戦争終結後のヨーロッパ国際秩序の成立とともにヴィッテンベルクの神学者た

ちが「世界宣教」の問題を「ヨーロッパ列強の植民地政策」と重ね合わせて見るようになっていったことが、この所見から読み取れるのである。

そしてこの所見を世界史的文脈のなかに位置づけ直してみると、そこからはもう一つの重要な問題が浮上してくる。それは、ヴィッテンベルクの神学者たちがモンティウスの書翰を引用した際、十六世紀末～十七世紀の日本における「カトリック宣教師の追放」と「キリスト教の禁教」の事実を果たしてどれだけ念頭に置いていたのか、という問題である⁽⁷²⁾。もしもその事実を意識しつつモンティウス書翰の引用がなされたのだとすれば、その引用は「日本でのカトリック宣教の失敗」を喧伝するための《カトリックへの論難》の一手段であった、とする解釈も成り立つからである。この問題は、所見の第2項の解釈とも関連する複雑な問いを投げかけている。そしてこうした視座に立ったとき、モンティウス書翰の引用をめぐる問題は、十七世紀のヨーロッパにおける《日本》認識の問題に繋がってゆくのである。

本稿では、十六～十七世紀のドイツ・ルター派の世界宣教観の形成過程における「カトリックの宣教情報の再利用」の問題に光を当て、「イエズス会士モンティウスが1564年に日本から書き送った書翰」がルター派神学者たちの著書・説教・大学所見のなかで繰り返し引用され、独自の解釈を施されてゆくプロセスに分析を加えることによって、この時期のドイツ・ルター派の世界宣教観と世界認識のなかで「カトリックの宣教情報の再解釈」が極めて大きな役割を演じていたことを明らかにした。紙幅の制約ゆえに、この時期のルター派の世界宣教観とカルヴァン派（改革派）の宣教情報及び宣教観との間にいかなる関わりが存在したのか、また、ルター派の世界宣教観が十七世紀後半以降にどのように変容していったの

か、さらに、日本以外の非ヨーロッパ地域に関する宣教情報がヨーロッパでどのように利用されたのか、といった問題については言及できなかったが、それらについては稿を改めて論じたい。

（補記）引用文中の〔 〕の中に記された語句は、本稿著者による補足を表し、〔…〕は、省略箇所を表している。引用文中に（ ）で挿入した原文表記や注の史料表題表記では、史料のなかで用いられている近世ドイツ語及びラテン語の綴りと省略記号をそのまま使用しており（但し、近世ドイツ語に見られる特殊なウムラウト表記は、現代ドイツ語のウムラウト表記に改めた）、名詞・形容詞・冠詞の格変化に関しても、本文中の表記をそのまま使用している。そのために、日本語翻訳文の格助詞と（ ）に挿入した原文表記の格変化とが照応していない箇所がある。注記中のVD16及びVD17の書誌データは、『ドイツ語圏で出版された16世紀の印刷物の目録』（*Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des XVI. Jahrhunderts*, Stuttgart, 1983-2000）と、この目録のデータに基づいて増補・編纂・公開されているバイエルン図書館連盟のオンライン・データベース（http://www.gateway-bayern.de/index_vd16.html）（2017年9月20日時点）に依拠している。なお、注記中の聖書の参照箇所は、『聖書・新共同訳』日本聖書協会、1996年に拠っている。本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号21520759）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- (1) D. F. Lach, *Asia in the Making of Europe, Vol. I*, Chicago, 1965, pp.XVII-XVIII; C. von Collani, Medien in der frühen Neuzeit, in: K. Koschorke (Hg.), *Etappen der Globalisierung in christentumsgeschichtlicher Perspektive*,

- Wiesbaden, 2012, S.105-133, bes. S.107.
- (2) *Bibliotheca Missionum*, Aachen, 1916- の各巻に収録された書誌情報を参照せよ。
- (3) 五野井隆史「日本イエズス会の通信について」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第11号[2001年], 154-167頁に所収), 154-156頁を参照のこと。
- (4) G. Warneck, *Abriß einer Geschichte der protestantischen Missionen*, Berlin, 1905, S.6-7; K. S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, Vol.3, New York/ London, 1939, pp.25-27; A. F. Walls, Art. „Mission, VI“, in: *Theologische Realenzyklopädie*, Bd.23, Berlin, 1993, S.40-59, bes. S.46-48.
- (5) ルター、ツヴィングリ、カルヴァンらの世界宣教観については、本稿の注(4)にあげた Warneck の研究に加えて、P. Drews, *Die Anschauungen reformatorischer Theologen über die Heidenmission*, in: *Zeitschrift für praktische Theologie*, Bd.28 (1897), S.1-26, 193-223, 289-316; H. Kasdorf, *The Reformation and Mission*, in: *International Bulletin of Mission Research*, Vol.4-4(1980), pp.169-175; W. Raupp, *Mission in Quellentexten*, Erlangen, 1990 を参照のこと。
- (6) K. Koschorke, *Konfessionelle Spaltung und weltweite Ausbreitung des Christentums im Zeitalter der Reformation*, in: *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, Bd.91(1994), S.10-24, bes. S.20-23; F. Ludwig, *Zur „Verteidigung und Verbreitung des Glaubens“*, in: *Zeitschrift für Kirchengeschichte*, Bd.112 (2001), S.44-64.
- (7) *D. Martin Luthers Werke, kritische Gesamtausgabe*, Bd.10, 3.Abt., Weimar, 1905, S.133-147. この説教は、以下のタイトルでパンフレットとして出版された。M. Luther, *Ain Sermon am Auffarttag*, Augsburg, 1522 (VD16 L 6042).
- (8) *Luthers Werke*, Bd.10, 3.Abt., S.138-139.
- (9) *Ibid.*, S.139.
- (10) *Ibid.*
- (11) フスの焚刑に関するルターの批判については、R. Stupperich, *Die Reformation in Deutschland*, Gütersloh, 1980, S.44(森田安一訳『ドイツ宗教改革史研究』ヨルダン社, 1984年, 55頁)を参照せよ。十字軍思想に対するルターの態度については、W. Holsten, *Reformation und Mission*, in: *Archiv für Reformationsgeschichte*, Bd.44 (1953), S.1-32, bes. S.12-13; H.-W. Gensichen, Art. „Heidentum, I“, in: *Theologische Realenzyklopädie*, Bd.14, Berlin, 1985, S.590-601, bes. S.597; 野々瀬浩司「マルティン・ルターの戦争観」(『史学』第84巻・第1-4号[2015年], 415-463頁に所収), 431-437頁を参照のこと。また、十字軍思想へのルターの異議申し立てに関して、ルター『トルコ人たちに対する戦争について』(1529年)のなかの以下の発言も参照されたい。[「…】教会の軍隊、あるいはキリスト教徒の軍隊を指揮することは、(一人のキリスト者たらんとする、いやむしろ、最上にして最良のキリスト教徒の説教師たらんとする)教皇にふさわしいことではない。なぜならば、教会は争いを行うべきではなく、剣を用いて戦うべきでもないからである。[「…】それ[教会]は[「…】皇帝や諸侯の戦争に関わってはならない。」(*D. Martin Luthers Werke, kritische Gesamtausgabe*, Bd.30, 2.Abt., Weimar, 1909, S.114.)
- (12) 『ローマの信徒への手紙』10章18節。
- (13) *Luthers Werke*, Bd.10, 3.Abt., S.139-140. このテキストは、Warneck, a. a. O., S.12-13; K. Holl, *Luther und die Mission*, in: *Neue Allgemeine Missionszeitschrift*, Bd.1 (1924), S.36-49, bes. S.38; W. Elert, *Morphologie des Luthertums*, Bd.1, München, 1952, S.342-343; Holsten, a. a. O., S.11; H. Dörries, *Luther und die Heidenpredigt*, in: ders., *Beiträge zum Verständnis Luthers*, Göttingen, 1970, S.327-346, bes. S.331で引用されており、Raupp, a. a. O., S.14に同テキストの現代ドイツ語訳が、また、V. Stolle, *The Church Comes from All Nations : Luther Texts on Mission*, St. Louis, 2003, pp.24-25に同テキストの英語訳が収録されている。
- (14) Vgl. Raupp, a. a. O., S.13; J. A. Scherer, *Gospel, Church & Kingdom*, Augsburg, 1987, pp.55-59.
- (15) R. Bellarmino, *DISPUTATIONES ROBERTI BELLARMINI ... SOCIETATIS IESV, DE CONTROVERSIIS CHRISTIANAE FIDEI, ADVERSVS HVIVS TEMPORIS HAERETICOS*, Ingolstadt, 1586 (VD16 B 1602), p.1350. Vgl. T. Dietrich, *Die Theologie der Kirche bei Robert Bellarmin (1542-1621)*, Paderborn, 1999, S.43.
- (16) Bellarmino, *op.cit.*, p.1352. Vgl. Koschorke, a. a. O., S.21-22; Ludwig, a. a. O., S.51.
- (17) *Die Bekenntnisschriften der evangelisch-lutherischen Kirche*, 12. Auflage, Göttingen, 1998, S.3. また、『一致信条書』聖文舎, 1982年, 3頁も参照せよ。和協信条書はドイツ語及びラテン語で記されているが、本箇所はラテン語文からの引用である。和協信条書の成立の経緯とその序文に関しては、蝶野立彦『十六世紀ドイツにおける宗教紛争と言論統制』彩流社, 2014年, 530-543頁を参

- 照のこと。
- (18) Walls, a. a. O., S.45-46; J. Metzler, Wegbereiter und Vorläufer der Kongregation, in: *Sacrae Congregationis de Propaganda Fide memoria rerum, Vol.1-1*, Rom/ Freiburg(Breisgau)/ Wien, 1971, S.38-78.
- (19) 蝶野立彦「十六世紀後半の南ドイツ及びオーストリアにおける対抗宗教改革と《日本》認識」(明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第11巻第1号[2017年], 97-110頁に所収), 106頁。
- (20) G. Scherer, *Ob es wahr sey...*, Ingolstadt, 1584 (VD16 S 2725), Bl.IIb-I2a.同パンフレットはヴィーンでも出版された (VD16 S 2726)。
- (21) 『コリントの信徒への手紙 (一)』4章15節。
- (22) Scherer, a. a. O., Bl.I2a.
- (23) *Ibid.*
- (24) P. Nicolai, *COMMENTARIORVM DE REGNO CHRISTI, VATICINIIS PROPHETICIS ET APOSTOLICIS ACCOMMODATORVM, Libri Duo, QVORVM PRIOR*, Frankfurt am Main, 1597 (VD16 ZV 28250).同書の第2巻も同年に出版された (VD16 N 1481)。
- (25) 同書の終末論的叙述に関しては, E. Staehelin, *Die Verkündigung des Reiches Gottes in der Kirche Jesu Christi, Bd.4*, Basel, 1957, S.89-109; R. B. Barnes, *Prophecy and Gnosis*, Stanford, 1988, pp.123-124を参照のこと。
- (26) P. Nicolai/ G. Artus, *Historia deß Reichs Christi*, Frankfurt am Main, 1598 (VD16 N 1482).
- (27) J. Moller, *CIMBRIA LITERATA, tom.3*, Copenhagen, 1744, p.512; W. Heß, *Das Missionsdenken bei Philipp Nicolai*, Hamburg, 1962, S.17-18, Anm.5.
- (28) Vgl. R. Mau, Art. „Herrschaft Gottes/ Reich Gottes, V“, in: *Theologische Realenzyklopädie, Bd.15*, Berlin, 1986, S.218-224, bes. S.221-222, 224.
- (29) 『キリストの王国』の第1巻・第1章には, 「キリストの王国の顕在的な徴 (apparentibus notis) とヨーロッパ, アジア, アフリカ, アメリカ, そして全世界にまで至る今日の教会の拡大 (propagatione Ecclesiae) について」という表題が付けられている (Nicolai, *op.cit.*, p.1)。
- (30) Raupp, a. a. O., S.64-66に『キリストの王国』の第1巻・第1章の抜粋の現代ドイツ語訳が収録されている。また, W. Holsten, Die Bedeutung der altprotestantischen Dogmatik für die Mission, in: ders., *Das Evangelium und die Völker*, Berlin, 1939, S.148-166, bes. S.149-154; Elert, a. a. O., S.341-343, Anm.2でも, ニコライの地誌学的記述の概略が紹介されている。
- (31) ニコライの生涯については, M. Lindström, *Philipp Nicolais Verständnis des Christentums*, Gütersloh, 1939, S.6-45; Wagenmann/ V. Schultze, Art. „Nicolai, Philipp“, in: *Realencyklopädie für protestantische Theologie und Kirche, 3.Auflage, Bd.14*, Graz, 1971, S.28-32; M. Brecht, Philipp Nicolai, in: *Jahrbuch für Westfälische Kirchengeschichte*, Bd.84 (1990), S.159-183; 小栗献『コラルの故郷をたずねて』日本キリスト教団出版局, 2007年, 75-85頁を参照せよ。また, 1600年頃にヨーロッパを襲った様々な「危機」に関しては, Brecht, a. a. O., S.161-162を参照のこと。教会史家M・ブレヒトはニコライを「危機の時代の体现者」と評している (*Ibid.*, S.162)。
- (32) 十六世紀のドイツにおける「宗派形成」と「宗派対立」の展開については, 蝶野立彦「〈宗派形成の場〉としての帝国議会」(甚野尚志／踊共二編『中近世ヨーロッパの宗教と政治』ミネルヴァ書房, 2014年, 209-232頁に所収)を参照せよ。
- (33) H. Smolinsky, Jülich-Kleve-Berg, in: A. Schindling/ W. Ziegler (Hg.), *Die Territorien des Reichs im Zeitalter der Reformation und Konfessionalisierung, Bd.3*, Münster, 1995, S.85-106, bes. S.99-100.
- (34) Brecht, a. a. O., S.162-169.
- (35) *Ibid.*, S.169; W. Timm, *Geschichte der Stadt Unna*, Unna, 1962, S.38-39; 小栗前掲書, 81頁。
- (36) 十六～十七世紀ドイツの「信心書」については, H. Lehmann, *Das Zeitalter des Absolutismus*, Stuttgart/ Berlin/ Köln/ Mainz, 1980, S.114-123; 蝶野立彦「近世ドイツにおける宗派的秩序と読書行為」(『書物と印刷の比較社会史』神戸市外国語大学外国語研究所, 2002年, 35-60頁に所収), 39-43頁を参照のこと。
- (37) P. Nicolai, *Frewden Spiegel deß ewigen Lebens*, Frankfurt am Main, 1599 (VD16 N 1483). Vgl. W. Zeller, *Der Protestantismus des 17. Jahrhunderts*, Bremen, 1962, S.XXIII-XXIV; Lehmann, a. a. O., S.114; Brecht, a. a. O., S.169-171; J. Wallmann, *Der Pietismus*, Göttingen, 2005, S.29-30 (梅田與四男訳『ドイツ敬虔主義』日本キリスト教団出版局, 2012年, 21-22頁)。
- (38) 吉田徳子「フィリップ ニコライと聖歌」(『名古屋聖霊短期大学紀要』第23号[2002年], 49-64頁に所収), 小栗前掲書, 82-83頁を参照せよ。
- (39) Nicolai, *COMMENTARIORVM DE REGNO CHRISTI*, p.4-5. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.3.
- (40) Vgl. von Collani, a. a. O., S.110; 蝶野「十六世紀

- 後半の南ドイツ及びオーストリアにおける対抗宗教改革と《日本》認識」, 98 頁。
- (41) Nicolai, *op.cit.*, p.53. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.16-17; Raupp, a. a. O., S.65.
- (42) Nicolai, *op.cit.*, p.53.
- (43) モンティウスは、イタリアのフェラーラで生まれ、1555 年にイエズス会に入会し、1562 年以降、日本での宣教活動に従事し続けたのち、1587 年 9 月 7 日に 58 才で平戸で没した。Vgl. Art. „Montius, oder Montanus (Johann Baptista)“, in: *Grosses vollständiges UNIVERSAL-LEXICON*, Bd.21, Leipzig/ Halle, 1739, S.1375-1376.
- (44) Nicolai, *op.cit.*, p.54.
- (45) *RERV A SOCIETATE IESV IN ORIENTE GESTARVM ... commentarius*, Dillingen, 1571 (VD16 A 122), Bl. Dd7b-Eela (p.215b-217a). Vgl. R. Streit, *Bibliotheca Missionum*, Bd.4, Aachen, 1928, Nr.948 (S.248-249); *Bibliographischer ALT-JAPAN-KATALOG 1542-1853*, Kyoto, 1940, Nr.12 (S.3). この書翰の全文は、Heß, a. a. O., S.56-58, Anm.23 にも引用されている。なお、村上直次郎訳『イエズス会士日本通信 (上)』雄松堂書店、1968 年、407-409 頁、及び、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第三期・第 2 巻』同朋舎、1998 年、231-233 頁 (東光博英訳) に、ポルトガル語版『日本書翰集』(エーヴォラ版) に収録されている同一日付の同一筆者による書翰の日本語訳が収められているが、その内容は *RERV A SOCIETATE IESV IN ORIENTE GESTARVM* に収録されているラテン語テキストの内容とは大きく異なっている。
- (46) 書翰の原文では、「祈祷式文」という言葉に「伝統的な (traditae)」という形容詞が付されているが、この形容詞はニコライの引用では削除されている。Vgl. Heß, a. a. O., S.57.
- (47) *RERV A SOCIETATE IESV IN ORIENTE GESTARVM*, Bl.Dd8a-Dd8b (p.216a-216b). Vgl. Nicolai, *op.cit.*, p.54-55; Nicolai/ Artus, a. a. O., S.17-18.
- (48) Nicolai, *op.cit.*, p.55-56. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.18.
- (49) Heß, a. a. O., S.56-59.
- (50) Ludwig, a. a. O., S.49-50 で、『キリストの王国』におけるモンティウスの書翰の引用について簡単な言及がなされている。
- (51) Nicolai, *op.cit.*, p.44-49. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.14-16.
- (52) Nicolai, *op.cit.*, p.49-51. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.16.
- (53) Nicolai, *op.cit.*, p.51-52. 日本に関する地誌学的記述は、ドイツ語抄訳版では省かれている。
- (54) Nicolai, *op.cit.*, p.91-92. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.34-35.
- (55) Nicolai, *op.cit.*, p.90. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.33-34.
- (56) Nicolai, *op.cit.*, p.89-90. Vgl. Nicolai/ Artus, a. a. O., S.33.
- (57) 1620 年代以降のドイツ (神聖ローマ帝国) において次第に広まってゆく脱《宗派主義》の趨勢と諸宗派和解説 (Irenik) について、H. Schilling, *Die Konfessionalisierung im Reich*, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.246 (1988), S.1-45, bes. S.28-30; 永田諒一『ドイツ近世の社会と教会』ミネルヴァ書房、2000 年、123 頁を参照のこと。
- (58) Nicolai, *op.cit.*, p.95-96.
- (59) Heß, a. a. O., S.56, Anm.23 で、神学者ヨハン・ゲルハルトの『神学の主要概念』にモンティウス書翰が引用されていることが指摘されている。
- (60) B. Richter, *Erster vnd ander Theil / Der Offenbarung Johannis ... Geprediget vnd außgelegt / Durch M. Balthasarum Richtern*, Leipzig, 1602 (VD17 23:330252G), S.338-339.
- (61) J. Müller, *Gründliche Antwort vnd Wiederlegung Derer Einwürffe mit welchē die Bāpstische Lehrer die Lutherische Kirche verdächtig machen...*, Hamburg, 1631 (VD17 23:649762Q), S.325.
- (62) *Ibid.*, S.324. Vgl. Raupp, a. a. O., S.73.
- (63) J. Gerhard, *LOCORUM THEOLOGICORUM...*, tom.5, Jena, 1617 (VD17 23:327894H).
- (64) *CONSILIA THEOLOGICA WITEBERGENSIA, Das ist / Wittenbergische Geistliche Rathschläge*, Frankfurt am Main, 1664 (VD17 1: 083814B), S.179-197.
- (65) Vgl. Ein Beitrag zur Geschichte der Missionsthätigkeit von Seiten der lutherischen Kirche, in: *Zeitschrift für Protestantismus und Kirche*, Bd.65 (1873), S.327-329; W. Grössel, *Justinianus von Weltz*, Leipzig, 1891, S.175-178; Warneck, a. a. O., S.26-27; Raupp, a. a. O., S.70-71; Koschorke, a. a. O., S.22; Ludwig, a. a. O., S.55.
- (66) *CONSILIA THEOLOGICA WITEBERGENSIA*, S.196. Vgl. Raupp, a. a. O., S.70-71.
- (67) 十六世紀にラップランドで行われたルター派の宣教活動について、Warneck, a. a. O., S.22-23; Walls, a. a. O., S.46 を参照のこと。
- (68) 十六世紀～十七世紀前半のブラジル及びバインドでのカルヴァン派 (改革派) の宣教活動について、Raupp, a. a. O., S.34-37, 75-77 を参照のこと。

- (69) *CONSILIA THEOLOGICA WITEBERGENSIA*, S.196.
- (70) *Ibid.*, S.196-197. この箇所での引用に際して、モンティウス書翰のテキストには僅かな修正が加えられており、書翰の原文に記されていた「前述の最初の人間 (primus ille homo)」という言葉から「前述の最初の」という文言が削除されている。この修正は、所見の第2項の記述と関連していると推測される。
- (71) *CONSILIA THEOLOGICA WITEBERGENSIA*, S.197.
- (72) 十七世紀のヨーロッパにおける「日本でのキリスト教徒迫害とキリスト教徒の殉教」に関する情報については、Ludwig, a. a. O., S.53; von Collani, a. a. O., S.111 を参照のこと。